

生活環境の暮らしやすさへの影響形態の経年変化分析

名城大学 学生員 伊東 裕晃
名城大学 正会員 松本 幸正
名城大学 学生員 堀場 庸介

1. はじめに

周辺の生活環境に対する評価を改善することは、暮らしやすさに対する評価を向上させることにつながると思われる。しかし生活環境の中には、評価を改善することにより、①住民の満足感が高まり暮らしやすい評価につながるものがあれば、②住民の不満感が解消されるものの暮らしにくい評価のままであるものなどがあると考えられる。地方自治体が生活環境の整備を効率的に進めていくためには、このような生活環境の特性を把握することが必要であると考えられる。

そこで本研究では、生活環境の特性を定量化するための分析手法を提案する。そして、豊田市において平成2年と11年に実施された市民意識調査の結果を用いて、生活環境の暮らしやすさへの影響形態と住民の満足感・不満感の経年的な変化を分析する。

2. 生活環境の暮らしやすさへの影響形態の定量化

ある生活環境に対する評価と暮らしやすさに対する評価でクロス集計を行い、例として表1、表2のようになったとする。表1は、生活環境に対して「満足」と評価した場合には多くが「暮らしやすい」と評価している。一方「不満」と評価した場合にはバラバラな評価となっている。表2は、生活環境に対して「不満」と評価した場合には多くが「暮らしにくい」と評価している。一方、「満足」と評価した場合にはバラバラな評価となっている。これらの場合、Cramer's Vは小さめに算出されるものの、満足評価側、不満評価側のみを見た場合には強い関連がある。そこで評価を「満足側とそれ以外」、「不満側とそれ以外」とし、二種類の方法でクロス集計を行い、Cramer's Vを算出する。なお、評価を「満足側とそれ以外」として算出したCramer's Vを満足反応値、「不満側とそれ以外」として算出したCramer's Vを不満反応値と定義する。

横軸に満足反応値、縦軸に不満反応値をとり、各生活環境の値をプロットしたものを満足-不満反応図と定義し、例を図1に示す。この図において45度線の右下方に位置する要因Aや要因Eは、「満足」と評価

表1 ある生活環境と暮らしやすさの評価の関係 1

		暮らしやすい	どちらでもない	暮らしにくい
生活環境 に対する 評価	満足	130	15	5
	どちら	10	80	10
	不満	15	15	20

表2 ある生活環境と暮らしやすさの評価の関係 2

		暮らしやすい	どちらでもない	暮らしにくい
生活環境 に対する 評価	満足	15	15	20
	どちら	10	80	10
	不満	5	15	130

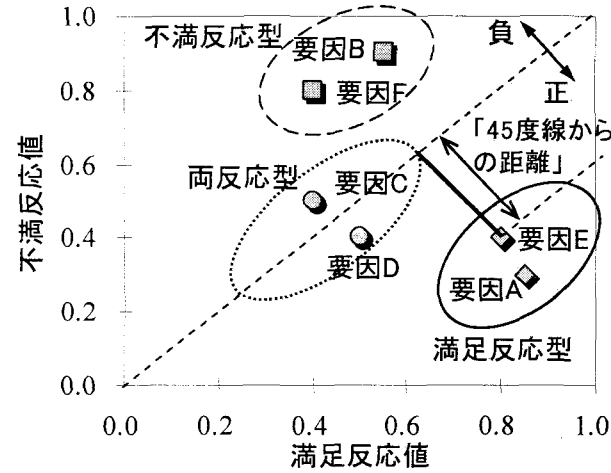


図1 満足-不満反応図の例

したときは「暮らしやすい」評価につながるが、「不満」と評価しても「暮らしにくい」評価にはつながらない。これを満足反応型と定義する。一方、45度線の左上方に位置する要因Bや要因Fは、「満足」と評価したときは「暮らしやすい」評価にはつながらないものの、「不満」と評価したときには「暮らしにくい」評価につながる。これを不満反応型と定義する。また、45度線付近に位置する要因Cや要因Dは、「満足」と評価したときは「暮らしやすい」評価につながり、「不満」と評価したときは「暮らしにくい」評価につながる。これを両反応型と定義する。

3. 暮らしやすさへの影響形態の経年変化分析

満足-不満反応図では、現時点における生活環境の暮らしやすさへの影響形態を把握することはできるものの、過去から住民の満足感・不満感がどのように変化したのかを捉えることができない。ここでは、これ

らを把握するための分析手法を提案する。

図1の満足-不満反応図を用いて、生活環境の暮らしやすさへの影響形態を一軸で把握するために、45度線から各生活環境までの距離を算出する。45度線を基準として、右下方を正、左上方を負とする。正の値が大きいほど満足反応型、負の値が大きいほど不満反応型、0付近の場合は両反応型にあると考えられる。

次に生活環境に対する住民の満足の大きさを表す指標として、生活環境に対して「満足」と評価した人と「不満」と評価した人の割合の差を満足度と定義する。

横軸に満足度、縦軸に45度線からの距離をとり、これを満足度-反応型分布図と定義し、例を図2に示す。この図において、例えば要因Bは、満足度が低くなり、両反応型から満足反応型に変化している。このことから要因Bは、住民の不満感が高まったものの、暮らしにくい評価にはつながらなくなっており、あきらかめ境地にあると考えられる。

4. 豊田市における市民意識調査結果を用いた分析

ここでは豊田市における市民意識調査結果を用いて、分析を行う。なお豊田市を、猿投、挙母、高橋、高岡、松平、上郷の六地区に分割し、分析している。

図3に豊田市において最も都市化が進んでいる挙母地区における平成11年の満足-不満反応図を示す。ここでは、Cramer's Vが0.25以上の生活環境をとり上げている。この図から、「子供の遊び場」や「道路舗装」などは、45度線の右下方に位置しており、満足反応型に属していることがわかる。このことから、この要因に対して「満足」と評価した場合には「暮らしやすい」評価につながるが、「不満」と評価しても「暮らしにくい」評価につながらないということがわかる。

図4に、挙母地区における満足度-反応型分布図を示す。この図から、「工場からの振動・騒音」は、満足度の変化が小さく両反応型から不満反応型に変化していることがわかる。このことから、住民の満足感はず変わらず、「満足」と評価しても「暮らしやすい」評価につながらなくなったという、静かで当然と感ずる存在になっていると考えられる。「公園・広場」、「近所付き合い」、「道路舗装」は、満足度の変化が小さく、両反応型から満足反応型に変化していることがわかる。このことから、住民の満足感はず変わらないものの、「不満」と評価しても「暮らしにくい」評価につながらなくなったという、その存在の大切さを認識したものとなつ

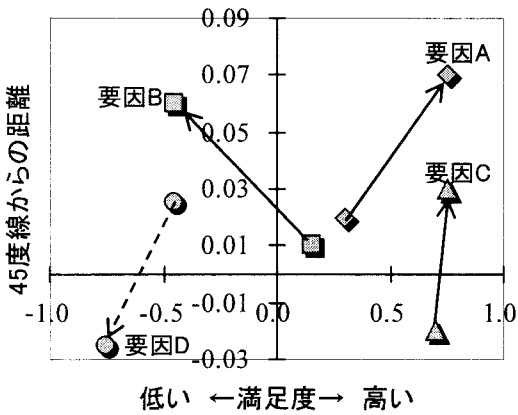


図2 満足度-反応型分布図の例

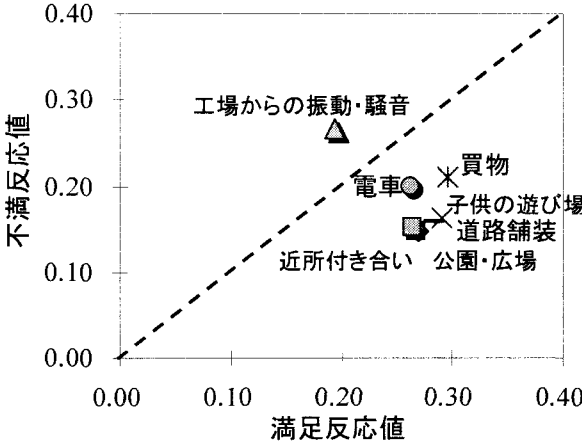


図3 挙母地区における満足-不満反応図

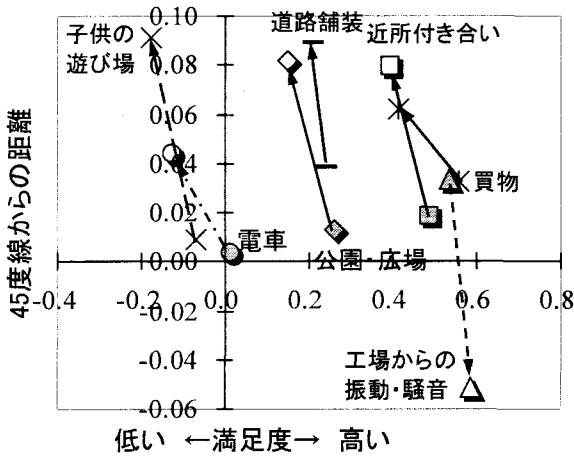


図4 挙母地区における満足度-反応型分布図

ていると考えられる。

5. おわりに

本研究では、豊田市における平成2年と11年の市民意識調査結果を用いて、生活環境の暮らしやすさへの影響形態と住民の満足感・不満感の変化を分析した。その結果、住民の満足感はず変わらず、「満足」と評価しても「暮らしやすい」評価につながらなくなったという、あつて当然と感ずる生活環境などを明らかにすることができた。今後は、これらの経年的な変化と施策や整備の実施状況との関係を分析する必要がある。